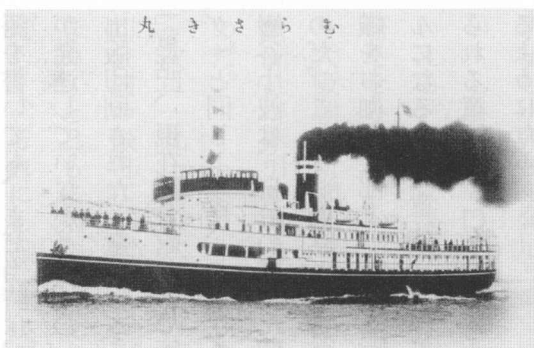


油屋熊八・梅田凡平・お伽船

堀田 穰

一、はじめに

京都、大阪の子どもたちが、夏休み客船に乗って、途中、音楽やお伽話を楽しみながら別府を訪れる。そんな子どものツーリズムが『お伽船』と呼ばれたイベントである。これは



別府航路、むらさき丸

一九一〇（明治四三）年にはじまって、一九四〇（昭和一五）年まで、なんと三十年にわたって、初期は毎年ではなかったとはいえ、続けられたのであった。これ自体、スケールの大きな、しかも官でなく民間の手で行われた、児童文化史上他に例を見ないイベントであることはまちがいが無い。

さらに、これが、子どもへのイベントにとどまらず、ここで培われた人脈が、観光開発に生かされ、日本八景での油屋熊八（あぶらや・くまはち）の活躍にまでつながっていった点が、特異であり、もっと注目されてよい日本近代史上のエピソードなのである。今回機会をいただいたので、ここになるべく全体的な像を描いてみたい。理解しやすくしたいので、図版も多く収めようと思う。

二、お伽芝居からお伽船へ

明治に入って、子どものための文化を育てたいという機運が少数の人々の間ではあるが、高まってきていた。なかでも近代児童文学のさきがけとなった文学者、巖谷小波（いわや・さざなみ）は、ドイツで子どものための演劇が行われていることを知り、我が国でも実現したいと願っていた。それを受けて、オペペーパー節で有名になった壮士芝居の川上音二郎（かわかみ・おとじろう）、その妻で日本最初の女優、貞奴（さだやっこ）の劇団が、お伽芝居という名称で、一九〇三（明治三六）年十月三日に、東京、本郷座で、小波の『浮かれ胡弓』『狐の裁判』を上演する。

ここからが、少し複雑だが、巖谷たちが子どものために物

語を書いても、まだ当時は、子どものための出版というものが発達していなかった。むしろ明治の頃、「童話」といえば、出版印刷された「童話」本を指すのではなく、語りとしての「童話」、現在図書館などで行われている「ストーリーテリング」と同じように、お話されるのが「童話」だった。そこで巖谷小波は、自分の書いた童話を全国をまわって語っていたのだ。これはお伽話とも言われたので、童話を語る大人の組織をお伽倶楽部といていた。のちに子どもの本の出版が盛んになると、「童話」は児童図書を意味するようになり、語られる童話は、口で演じられる童話、「口演童話」と呼ばれるようになる。

振身の嘆感



口演童話家、岸辺福雄
『御伽噺仕方の理論と実際』

お伽芝居をプロデュースしたのも、巖谷や久留島武彦（くるしま・たけひこ）など、東京のお伽倶楽部のメンバーであった。そして、川上劇団のお伽芝居は、全国を巡業してまわり、

好評を得るとともに、口演童話を中心とした児童文化運動を担っていたアマチュアたちが、自らもお伽芝居を演じ始めることになる。関西では、このお伽芝居の劇団が中心になって京都お伽倶楽部、大阪お伽倶楽部が発足する。そして、アマチュアによるお伽芝居第一号は、東京よりわずかだが一足早い一九〇七（明治四〇）年一月、大阪中之島公会堂にて高尾亮雄（たかお・あきお）らによる上演だった。

この高尾が、一九〇九（明治四二）年八月、京都お伽倶楽部の子どもたちを播州高砂に連れ出して、海浜学校と称する臨海学校を行った。これは林間学校、臨海学校の歴史としても、嚆矢とされる東京下谷区（現在の台東区）本郷区（現在の文京区）に遅れていないと思える。

この成功に続いて、一九一〇（明治四三）年八月七日、子どもと付添いを含めて二百八十三名が、大阪商船の利根川丸を借り切って、別府に向かった。直行ではなく、瀬戸内海巡遊ということで、巖島神社や高松などにも立ち寄る。東京からも、巖谷、久留島、そして天野雉彦（あまの・きじひこ）が参加している。いずれも後年、口演童話家として有名になる人々である。そして、京都日出新聞には、この旅行に同行した記者によって、八月十二日から十五日までの四日間に関

たつて「お伽船記」という連載記事が載せられた。この最初の命名と、後期の担い手、蓮井玄英（はすい・げんえい）がやはりつねに「お伽船」と呼んでいたので、実際には「子宝船」とか「子ども船」とか、あれこれの名称があったこのイベントの総称を「お伽船」と呼ぶことにしたい。

三、高尾亮雄

大正に入つて、高尾はますます、その活動を活発化させる。まず、一九一三（大正二）年大阪三越百貨店を拠点に、大阪子ども研究会を発足。東京三越での巖谷や坪井正五郎（つばい・しょうごろう）らの参加する児童用品研究会の大阪版といえる。ここに集まったのが、橋詰良一、辻村又男。橋詰は号をせみ郎といい、大阪毎日新聞記者、辻村は号を秋峰という大阪朝日新聞記者。この後、関西の児童文化を朝日、大毎新聞社が牽引するようになる、その主要メンバーがそろつたのだ。

次に一九一四（大正三）年、高尾は宝塚少女歌劇団の第一回公演の振付に、同じお伽劇団の久松一声（ひさまつ・いっせい）とともに招かれた。このころ、大阪は産業活動はなほだしく、それにとまなう煤煙公害にも悩まされていた。それ



宝塚少女歌劇第一回公演「ドンブラコ」

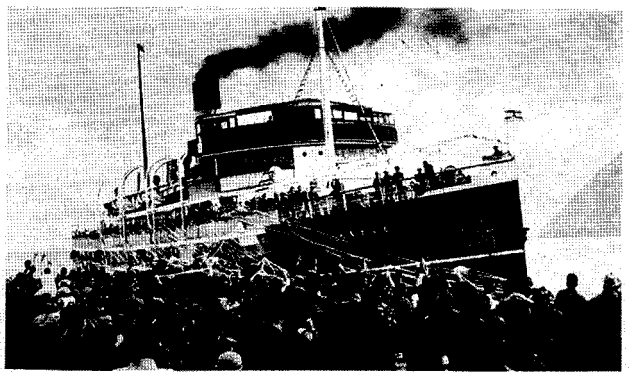
に對して、箕面有馬電氣軌道（現在の阪急電車）の小林一三（こばやし・いちぞう）は、まず、川面村としか呼ばれていなかった所の温泉を「宝塚新温泉」と名づけ、そこでのアトラクションとして宝塚少女歌劇を創設した。そこに観光客を呼び、しだいに沿線に郊外住宅を建設していった。この辺りの小林の手法は津金澤聰廣著の『宝塚戦略』に詳しい。ここで注目して欲しいのは、お伽芝居は、久松がその後、長く少女歌劇団にとどまることで、宝塚少女歌劇に受けつがれていったことである。

高尾は第一回で少女歌劇を離れるが、初期の少女歌劇を支えたのが、大阪毎日慈善事業団であったり、梅田凡平（うめだ・ばんぺい）が渡米する時に後援会ができ、その中小林一三の名があったりするの、ここらでの縁のなせる業であろう。

そして、一九一六（大正五）年おそらく第三回のお伽船が行われ、この後、お伽船は毎年のイベントとして定例化していく。ただし、一九一六年のお伽船については、京都市教育会の海上学校という名称で、鈴木吉之助など京都の口演童話家や、久留島は関わっているが、活動の場を大阪に移していた高尾の名前は、京都日出新聞、大阪朝日新聞京都付録などの記事に見当たらない。

四、油屋、梅田以前の別府

大分新聞のマイクロフィルムは、一九一八（大正七）年からのものしか大分県立図書館に所蔵されておらず、それ以前の動きは、京都日出新聞をはじめとする関西の新聞からしかうかがえない。さらに、筆者は関西在住で、年に数日大分県立図書館のマイクロフィルムを調査できるだけである。当然見落としもあるはずで、今後は『別府史談』に集う史家の方々に期待したい。その際に気をつけていただきたいのは、油屋熊八の神格化、伝説化である。筆者はすでに「油屋熊八伝説を疑う」「油屋熊八伝説の生成」（京都学園大学『人間文化研究』第九、十号）という論文を書いているので、詳しくはそちらをご覧いただきたいが、油屋が偉大だったからといって、な



A FAMOUS PLACE BEPPU HOT SPRING 別府定期定行府明 (縣名京滬府別)

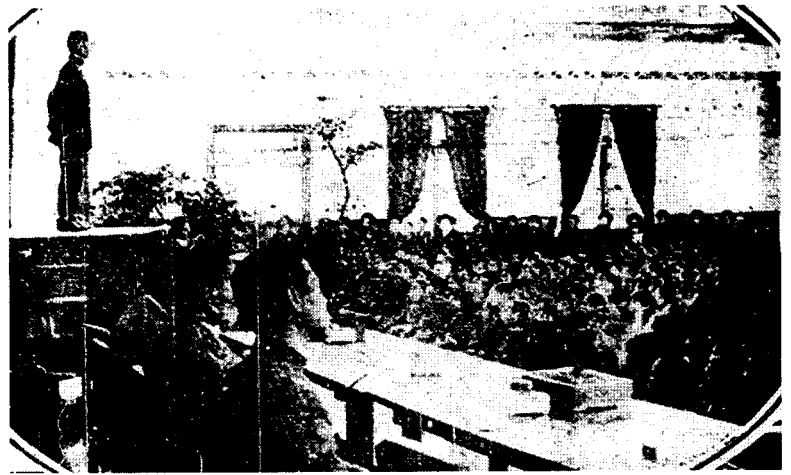
別府港と定期客船

んでもかんでも油屋の仕事にしてみるのは、かえって失礼に当たるだろう。

これまでの調査によると、一九二一（大正十）年まで、梅田凡平の名はお伽船の記事には現れていないし、ここに油屋熊八の名前はない。油屋が梅田とともにお伽船の記事に登場するのは昭和に入っ

て、一九二七（昭和二）年八月四日の香川新報（香川県立図書館蔵マイクロフィルム）の記事が初めてになる。どうか地元史家が、徹底的に調査して、この暫定的な認識を変えてほしいものである。

では、それまでの別府は、ただ関西からのお伽船を受け入れていただけなのかといえば、そうではない。機会を得てきた大分県立図書館での調査ができた際に、念入りに調べたの



大分新聞「少年少女お話大会」

いメディアがあればまた事情が違うだろう。

そのかわり、岩田実科高等女学校（現在の**大分市**、**岩田学園**）教諭だった**小野直**（おの・すなお）が口演童話家として活躍していたのを知ることができた。ハイライトは一九二〇

は一九二〇（大正九）年の大分新聞であった。なぜなら別府市立図書館にある**梅田凡平**資料によると、別府お伽倶楽部の発足が一九二〇年十月三十日とあるからだ。残念ながらその記事を見つけたことはできなかった。当時大分新聞以上に別府に詳し

年十一月二十八日の大分新聞主催の「少年少女お話大会」で、大分市県公会堂にて、**小野直**、**河野久男**、**三宅建**、**清水肇**、**宮崎嘉七**が講師として出演した。小野は口演童話の歴史書としては唯一とっていい『日本口演童話史』にも名が挙げられており、昭和になってから朝日新聞に入社し、兵庫県西宮市に住んだ人である。

五、**梅田凡平**の大活躍

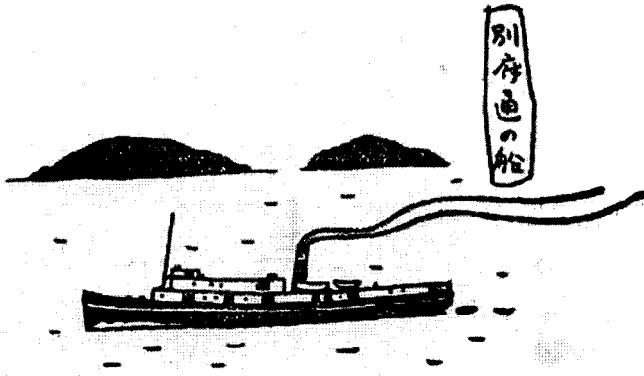
小野直たちの活動と、**梅田凡平**がどう重なっているのかは、まだわからないが、一九二二（大正十）年、八月十四日の大分新聞に別府お伽倶楽部の一行が、八月八日京阪神見物に旅立ったという記事が載る。別府お伽倶楽部の幹部は「**梅田**、**平岡**、**千原**、**有村**、**後藤**、**佐藤諸氏**」とある。先の大分新聞の一九二〇年十一月二十五日の「少年少女お話大会」の広告には**宮崎嘉七**の代わりに**平岡一策**の名があり、ひょっとしたらこの「**平岡**」と同一人物かもしれない。そうだとすれば、**小野**たちの口演童話活動との連続性も考えられる。

大阪で出迎えたのは「**鷹尾**」氏、「**梅田**」が**梅田凡平**であり、「**鷹尾**」が**高尾亮雄**であるとすれば、資料上での初の出会いである。「大阪海上学校生徒の見送りの為」とあるから、

関西からのお伽船が刺激になって、いきなり、別府お伽倶楽部の名とともに登場し、逆「お伽船」を実行したのだ。

ここからの梅田は、大分新聞紙上でも大活躍をはじめた。

一九二二（大正十一）年八月二十四日大分新聞の記事では布袋腹を突き出した梅田ニコニコおじさんと、短軀長髪の親しみに満ちた顔の高尾亮雄氏と、双方描写され、お伽船訪問側



スミカズ『新絵画ノ手本』から

と歓迎側で登場している。そして訪問団には宇崎純一（うざき・すみかず）の名も見られる。今でも忘れられているが、大阪の竹久夢二といわれた人気挿絵画家である。

是永勉『別府今昔』で梅田の歓迎のありさまを

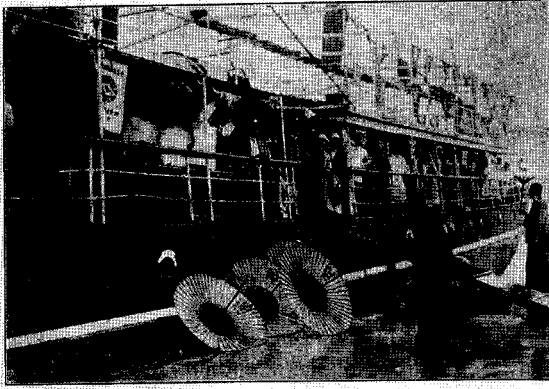
「凡平がモーニングを着てカスターネット

を鳴らしながら、皆さーん、ようこそ別府へおいでくださいました。別府の海も山も旅館も、皆さんのおいでを心から歓迎しておりまーす」と棧橋に立って大きな声をはりあげることにになり、熊八がモーニングを新調してくれた」

と書いているのは、何も定期船を相手にしているのではなく、お伽船で訪れてくる子どもたちを歓迎した様子だと考えられる。関西からのお伽船だけでは少ないのでは、と思われるかもしれないが、新聞記事を見ると、一九二二年七月三十一日大分新聞には東京の慶応義塾幼稚舎生歓迎に別府お伽倶楽部の梅田凡平が『暑くて寒くて五分五分だ』と滑稽踊りをし、原氏は独特の童謡を歌ったとある。原氏とは原北陽（はら・ほくよう）、水引のおじさんのことだろう。子どもに関する文化運動のネットワークは全国に存在し、そのひろがり、別府を訪問する子どものツーリズムの増加をもたらしたのである。

さらに、著者はかつて『瀬戸内海子ども連盟』について『京都文化短期大学紀要』第二五号」という論文を書き、梅田資料にある「瀬戸内海子ども連盟」の発足を、やはり大分新聞の記事では確認できないと書いた。ところが、その後、高尾の関わった、児童愛護運動を調べるうちに、そちらから

コドモ愛護船宮島に港入



皇朝花のために設立つた宮島へ、コドモの社会を考へた「コドモ愛護船」
離れ、着陸して居ました。(記者撮影)

コドモ愛護「コドモ愛護船宮島に港入」

梅田凡平が安芸の宮島で瀬戸内海コドモ連盟の生立ちを述べたという記事を見つけたのである。高尾や梅田の運動を、子どもにお話を聞かせて、富裕な層の子どもたちを船に乗せて喜ばしていただけないように理解す

真相が判明した。つまり、一九二一年に高尾は大阪市役所がらみで児童愛護デーを設置し、全国にも賀川豊彦と並び称される社会福祉の雄、大阪北市民館長、志賀志那人（しが・しなど）と語りあって児童愛護連盟を発足させた。一九二三（大正一二）年にはコドモ愛護船を、お伽船よろしく、瀬戸内海に走らせたのであった。大阪児童愛護連盟の機関誌『コドモ愛護』十二年八月号にはコドモ愛護船のルポがあり、そこに

るのがいかに一面的であるか。児童愛護連盟の運動は、乳幼児検診の推進など、むしろ都市貧困層の子どものための保健活動の面が強かった。彼らはそれを、お伽船ネットワークを生かして進めたのだった。「瀬戸内海コドモ連盟」というのは、だから、「瀬戸内海コドモ愛護連盟」ということだったのである。口演童話や、お伽倶楽部のイメージだけで探していたので、うかつにも追求が至らなかったわけだ。

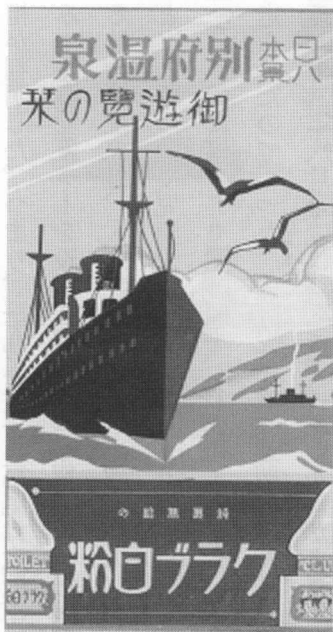
一九二五（大正一四）年七月二十五日の大分新聞には「お伽団や学生団続々別府へ」という記事が載り、いよいよ、高松お伽倶楽部や広島お伽倶楽部の名前が新聞にも現れてきたのだ。この年はデンマークの童話作家アンデルセンの没後五十年であった。これに子どもの全国ネットワークが動かないわけがなく、別府では、もともと郷里が大分県玖珠町である久留島武彦を迎え、八月四日に「アンダーセン」祭を行った。NHKラジオ放送では巖谷が「アンデルセンについて」を話したり、全国でアンデルセン関連のイベントが行われ、この功で巖谷と久留島には、デンマーク国王からダンネプロ勲章が贈られている。

この時新聞紙上から見ると、岡山子供団、松山こども会、広島海明お伽会、広島市国際こども連盟、大阪夕陽丘高女生、

神戸第二中學生、大阪偕行社附属小學生、神戸市立橋小學生など、瀬戸内海沿岸の学校や子ども関係の団体が別府に集うたが、中でも重要なのは高松お伽俱樂部だった。これを率いたのは高松の僧侶、蓮井玄英。高松からのお伽船はここが第一回で、これから最後の第十六回、一九四〇年までお伽俱樂部とお伽船の旗を掲げ続けたのである。

六、油屋熊八の登場

一九二七（昭和二）年四月九日大阪毎日新聞社は、東京日日新聞と組んで『日本新八景』の選定を呼びかける。「昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景は、よろしくわれ等の新しい好尚によって選定されなくては」ならないとして、山岳、溪谷、湖沼、海岸、河川、平原、瀑布、温泉の八つのジャン



日本八景別府温泉御遊覧の葉

ルの第一を、まず一般公衆からのハガキによる推薦を受けるとした。これが一大ブームを引き起こし、九千万票を上まわる投票が集まった。

七月六日大阪毎日新聞は日本新八景を発表する。あまりに盛り上がり、八景だけではおさまらず、二十五勝、百景も選び出していたことだった。予想通り、温泉では別府が選ばれた。ここで油屋は当時まだ珍しい飛行機で、大阪毎日新聞への感謝を表しに、大阪へ飛んだことが七日の毎日新聞記事にある。

実は、このころ、内務省は国立公園制定の構想をねっていた。七月二十二日にはその『国立公園選定の方針』が発表される。それによると「国立公園の風景は全国的興味を引き得るほどの主要なものに限る」が「国民的利用を主眼とするゆえ」「必ずしも第一流の風景地たるを要せず」とした。『近代日本公園史の研究』の丸山宏によれば、新八景は一時的なブームに過ぎなかったが「風景の大衆化」を果たしたと指摘した。これにしっかりと乗ったのが油屋熊八であったのだ。八月十四日の大阪毎日新聞「世界の楽土大別府の偉観」という全面広告の中で、亀の井ホテル社長油屋熊八談として「八景二十五勝百景の決定を機会に九州に一大国立公園の案」が出てい

る。新八景の山岳で選ばれた雲仙岳と手を結び、阿蘇を中心



別府温泉・地獄めぐり・女車掌説明・
亀の井バス

に九州を一大国立公園にする運動をすると宣言している。

実際に油屋はこの年、十二月、大型遊覧バス数台を購入して、地獄めぐり遊覧を開始する。バスガイドに各名所を説明させて評判をとった。油屋熊八の別府観光開発のための大奮闘がはじまるが、梅田を介してつながっている関西の経済力と情報力をバックにしていたからこそそのスケールの大きさであった。八月四日付け香川新報では筆者が見つつけられる限りで、もっとも早い、梅田、原とともに「頭のピカピカおじさん」として別府お伽倶楽部の油屋熊八の名前が出ているのだ。翌一九二八（昭和三）年七月、アメリカ、ロスアンゼルスにおいて第十回世界日曜学校大会が開かれることになった。

六月三日の大分新聞では梅田凡平や、川島唯次郎、永見永左衛門、里村ミツエなどが大分県下から参加することを報じている。この時、梅田は陣羽織で金蘭兜の「桃太郎」コスチュームでアメリカに出かけるのだが、別府市立図書館に残っている梅田資料の中に、渡米後援会を呼びかける発起人、賛同者の名が載ったチラシが残っていた。そこには阪急の小林一三、大阪毎日新聞社長の本山彦一、南海鉄道専務取締役の大塚惟明、中山太陽堂の中山太一、日本簡易火災保険取締役の山本藤助など関西実業界の大物達の名前が連ねてある。東京の賛同者が巖谷、久留島、芦屋芦村、野口雨情、中山晋平、天野雉彦、沖野岩三郎等ほとんど童話界の人々であったのと対照的であった。

梅田は桃太郎姿でアメリカをのし歩いたが、帰国して翌の一九二九（昭和四）年四月一日に死去、大分新聞には四月二日に死亡記事がのった。あとを受け継いだ形になった油屋は、一九三一（昭和六）年国立公園法が制定され、さらに一九三四（昭和九）年瀬戸内海、雲仙、霧島の九州の三公園が最初に三月に指定されたので、面目躍如であった。特に瀬戸内海という指定は唯一の海上公園として、世界に例がないといわれ、また、お伽船の「瀬戸内海コドモ連盟」構想がまさに先

取りだった点で、構想力の勝利だったのではないか。同じ年の十二月には阿蘇も指定を受けたから、油屋が七年前に予言した、九州一大国立公園化は実現された。しかし、一九三五（昭和十）年三月二十七日、油屋熊八も亡くなってしまふ。

七、その後とまとめ

一九四〇（昭和一五）年、高松お伽倶楽部が最後のお伽船を出し、三十年続いたお伽船は終了する。一九四五（昭和二〇）年七月四日の高松空襲で、蓮井玄英は寺とともに焼死させられる。七十歳を越えた高尾亮雄は敗戦後の一時を、別府鉄輪鬼石坊主地獄辺りに身を寄せていたことがわかっている。明治という時代には、「子ども」という存在そのものが、近代の息吹を伝える新しさであった。童話や昔話という想像力と、船という交通手段を結びつけ、それが結果として、日本新八景から国立公園制定までの観光開発に結びついていた。これはある意味では、小林一三が宝塚と阪急電車で行った事業の手法を、はるかにしのぐスケールの大ききで実現して見せたともいえよう。

この動きについては、観光人類学、民俗学の斎藤純が「箕面動物園の桃太郎の宮―お伽話・児童・ツーリズム」(『昔

話―研究と資料―』(三二号)で、筆者と相互に共通する視点で解明を進めているが、さらなる研究者、史家の戦線参加を期待したい。なにしろ瀬戸内海全体が舞台であり、たとえば、広島、岡山などは手付かずである。また、学問分野では観光学からのさらなる検討もほしい。別府お伽倶楽部についても梅田資料と新聞記事のギャップを埋めるものが、まだ見つかっていない。拙文を読んでいた方々に、関心の持続をよびかけたい。いっしょに探しましょう。

堀田 穰(ほった・ゆたか)

一九五二年名古屋生れ。神戸大学文学部哲学専攻卒
国立民族学博物館情報管理施設資料室、豊中市立図書館司書
などを経て、現在京都学園大学人間文化学部教授。専門は児童文化論、図書館情報学。

著書「大阪お伽芝居事始め―『うかれ胡弓』回想と台本」

高尾亮雄著・堀田穰編 関西児童文化史研究会一九九一